

## 心谷の悲恋物語 (佐田)



佐田から佐々木に越す峠の谷は、「こころ谷」と言うロマンチックな名がついておりますが、これはその名にまつわる悲しい恋の物語です。

昔むかし、京の都に、ある若い公家が住んでおり、彼はたいそう立派な風采をしていたので、都の娘たちの中には思いを寄せる者も多くございました。

ある日のこと、公家は都大路で一人の娘に道をたずねました。ふり向いた娘は、「どきつ」としました。きりっとした口元、やさしくほほえみかける瞳、ひとめで公家を好きになってしまったのです。

それからの娘は、病に取りつかれたように公家を恋いこがれる毎日に変わりました。用もないのに都

大路に出て公家の通るのを待つこともございました。

公家は、娘がやさしく会釈してくれるので少し心に止めはしましたが、自分のまわりに群がってくる多くの娘たちと同じくらいにしか思っていないませんでした。

少し涼しくなったある初秋のことです。但馬の佐々木庄に、たいへん高貴な方をお祀りした神社があり、その秋祭りの祭礼に、若い公家が勅使として代参することが決まりました。

娘はそのうわさを耳にすると、何となく不安にられました。公家が佐々木庄から都へは二度と帰って来ないような気がしたのです。娘は思いあまったある日、都大路で公家に自分の思いを打ち明け、一緒に佐々木庄に連れて行ってくださいと懇願しました。

娘の告白を聞いて、公家はたいそう驚きました。都大路で出逢う娘から、まさか恋心を打ち明けられるとは夢にも思っていなかったからです。それに勅使として代参する地に、娘を連れて一緒に行くなどできるはずがありません。娘の心を傷つけないよう、必ず帰って来るからと言ってその場を取りつくり、数日後のある秋晴れの朝、公家は佐々木庄へ向けて都をあとにしました。

娘は、公家の言葉を信じて待つことにしましたが、日が経つにつれ、恋心はつのる一方です。そしてとうとうある日、公家の後を追って旅立って行きました。

娘の一人旅は、並たいていのものではありませんでした。大きな峠をいくつも越さねばならず、

足には豆ができて血がにじむこともありましたが、公家恋しさのあまり、痛さも辛さも、また恐さも忘れて歩き通しました。

やがて片野庄にたどり着きました。ここまで来れば、佐々木庄は峠を一つだけ越せば、もう目と鼻の先なのです。でも娘は、公家に迷惑をかけてきられなくなかったので、これより先へ進むことはできませんでした。はやる心を押さえながら、近くの大將軍塚で待つことにしたのです。

一日過ぎ、二日経ち、そして十日経ちました。娘は毎日、谷から峠を見上げて公家を待ちました。が、いっこうに公家の帰って来る様子はありません。

ところで、都の娘が峠の向こうで自分の帰りを待っていることなどつゆ知らぬ公家は、神社の境内にある「なんじゃもんじゃの木」にさわれば、直ちに恋人ができるという話を聞き、ためしにさわってみました。するとどうでしょう。祭礼に巫女として上っていた美しい村の娘を、たちまち好きになってしまったのです。そして、都の娘のことは、すっかり忘れてしまい、村の娘と結婚して佐々木庄へ住むことに決まってしまうました。やがて大將軍塚で待っている娘にも、その話が伝わってきました。恋しい公家が、もう二度と自分のもとに帰って来ないと知った娘は、悲しさのあまり、すっかりやつれ果て、泣く泣く都へ帰って行きました。それ以後、娘が毎日峠を見上げて恋心をつのらせた谷を「恋心の谷―心谷」と呼ぶようになり、今に至っております。